

1歳半の子どもに対する絵本の読み聞かせ方および育児語の使用 と母親の信念の関連性

村瀬俊樹*

Effects of Beliefs Held by Japanese Mothers on Picture-Book-Reading Practices
and Use of Baby-Talk Words

Toshiki MURASE

キーワード：絵本の読み聞かせ，育児語，社会化目標，信念

Abstract

It has been suggested that Japanese mothers frequently use baby-talk words for their children, and that the speech of Japanese mothers directed at their children during book-reading is more affection oriented and less information oriented in comparison to North American mothers. However, the reasons for these have not been clarified. Therefore, the relationships between maternal use of baby talk words and picture-book reading practices with their socialization goals, and beliefs regarding caregivers' speech and picture-book reading was investigated.

Japanese mothers (n=62) of toddlers (age range : 17-22-months ; 87.8% 18-19-months old) responded to questionnaires about use of baby talk words, picture-book reading practices, beliefs about caregivers' speech to toddlers, beliefs about benefits of picture-book reading to toddlers, and maternal socialization goals for when their children would be 5-years old.

Factor analyses indicated the following factor structure: Autonomous-Relational Goal factor and Achievement Goal factor related to maternal socialization goals, Empathy Orientation factor related to beliefs about caregivers' speech, Affectionate Function factor and Practical Function factor related to beliefs about benefits of picture-book reading, and Dialogic Reading factor and Acceptance-Oriented Reading factor related to book-reading practices. The descriptive analysis showed that Japanese mothers closely agreed with questionnaires that were highly loaded with autonomous-relational goals, empathy orientation of beliefs regarding caregivers' speech, and affectionate function of benefits of picture-book reading. Path analysis indicated that maternal autonomous-relational goals concerning socialization were significantly related to empathy orientation of beliefs regarding caregivers' speech. The path analysis also showed empathy orientation of beliefs regarding caregivers' speech was significantly related to use of baby-talk words, and acceptance-oriented reading and dialogic reading.

*島根大学法文学部

These results demonstrate that Japanese mothers are oriented to have affectionate-empathetic relationships with their children. Their autonomous-relational goal of socialization leads to their empathy orientation in their belief about caregivers' speech, which in turn leads to use of baby-talk words, and dialogic and acceptance-oriented picture-book reading practices.

問 題

養育者が乳幼児に向けて話すことばは、成人に向けて話すことばとそれが異なることから、対乳幼児音声 (Infant Directed Speech: IDS, Child Directed Speech: CDS) と呼ばれて研究されてきた。IDS/CDS は、韻律的特徴、統語的特徴、談話的特徴、意味的特徴、語彙的特徴など、様々な次元で成人に向けて話すことばと異なる特徴を持つ (Garton, 1992; Pine, 1994)。

日本の養育者が子どもに向けて話すことばも、このような IDS/CDS の特徴を有しているが、日本の養育者において特徴的なことは、子どもに対して特別な語を使用することが顕著であるということである。子どもに対して特別によく使われる語は育児語と呼ばれている (村田, 1960)。育児語は、擬音語擬態語の使用、音韻の反復、語の般用傾向、接尾辞「さん」・「ちゃん」・「くん」を付加する傾向、接頭辞「お」を付加する傾向、音の転用や省略などがその特徴として挙げられる (早川, 1981; 村田, 1960; 村瀬・小椋・山下, 2007; Toda, Fogel, & Kawai, 1990; 友定, 2005)。米国の養育者と比較した研究では、0歳代から1歳代にかけて、日本の養育者の方がこれらの特徴を持つ語を用いる傾向が強いことがわかっている (Fernald & Morikawa, 1993; 小林, 1986; Toda, et al., 1990)。

それでは、日本の養育者は、なぜ、子ども

に対して育児語を用いるのだろうか。文化とは、シンボリックなレベルでの人々の信念と、相互作用のパターンが統合されたものであると考えられている (Shweder et al., 1998)。この考えに基づくと、養育者がなぜ育児語を使用するのかということを実証的に明らかにする方法の一つは、養育者の育児語使用傾向と養育者の信念の関係を調べることであると考えられる。

これまで、中国の養育者とアメリカの養育者の間で、ことばかけに関する信念とことばかけ行動の比較研究 (Johnston & Wong, 2002) がなされているが、日本の養育者が育児語を使用する動機を検討するためには、日本の養育者が持つことばかけについての信念を取り上げる必要がある。日本の養育者は、子どもに対することばかけについて、優しく、まねしやすく話しかけることを重視しているという報告があるが (Fernald & Morikawa, 1993)、日本の養育者が持つことばかけについての信念に関する実証的な研究はなされていない。

そこで、本研究は、日本の養育者が持つ子どもに対することばかけについての信念を測定する質問項目を開発し、それと育児語使用傾向との関係を検討することを第1の目的とする。

ところで、信念は、最も一般的な世界観から特定の行動をどのようにするべきかといった実践的な信念まで、階層構造を持ったシステムとして組織化されているものであると考

えられている (Sigel & McGillicuddy-DeLisi, 2002)。子どもに対することばかけに関連する養育者の信念についても、養育者が子どもに対してどのような子どもに育ててほしいと考えているかという社会化の目標といったような、養育者のより一般的な子ども観と関連付けて検討することが必要であろう。本論では、養育者が持つ子どもに対する社会化の目標が、ことばかけに関する養育者の信念とどのように関連し、それらが養育者における育児語の使用傾向とどのように関連するのかについて明らかにすることとする。

また、本論では、育児語の使用以外の養育者の言語行動として絵本の読み聞かせ方を取り上げ、養育者における絵本の読み聞かせ方と養育者の信念の関係を明らかにする。

絵本の読み聞かせ方については、日本の母親は米国の母親よりも模倣と間主観性の確認に基づく共感的読み聞かせ方を行う傾向があり、米国の母親は日本の母親よりも質問とフィードバックに基づく対話的読み聞かせ方を行う傾向がある (Murase, Dale, Ogura, Yamashita, & Mahieu, 2005)。また、日本の公共図書館で発行されている養育者向けのパンフレットには、米国の公共図書館で発行されているものよりも親子の情愛を育むような読み聞かせを推奨する傾向があり、米国の公共図書館のパンフレットには、日本のパンフレットよりも情報志向的な読み聞かせ方を推奨する傾向がある (村瀬, 2004)。

絵本の読み聞かせについての信念に関しては、秋田・無藤 (1996) が、幼児を持つ母親を対象に、絵本の読み聞かせが持つ意義に関する信念について調べている。その結果、幼児を持つ日本の母親は、絵本の読み聞かせに対して、空想したり親子のふれあいをするという意義、文字を覚え、文章を読む力や生活に

必要な知識を身につけるといった意義を認めていることを明らかにした。そして、空想したり親子のふれあいをするという意義を重視している母親が多かった。それでは、育児語が頻繁に使用される2歳代頃までの子どもに対する絵本の読み聞かせ方に関して、日本の養育者はどのような信念を持っているのだろうか。この点についてはまだ明らかにされていない。

そこで、本論では、日本の養育者における絵本の読み聞かせ方と、養育者が持つ絵本の読み聞かせに関する信念、ことばかけに関する信念、社会化の目標との関連性を明らかにすることを第2の目的とする。

方 法

調査対象者

1歳半健診を受診した子どもの保護者を対象とした。調査用紙配布日の全受診者数は180名であり、うち149名に調査用紙を配布し、回答を依頼した。回答者は76名であった (配布者の51.0%、受診者の42.2%)。回答記入者の内訳は、母親73名、父親2名、祖母1名であった。母親が回答記入者であり、かつ、記入漏れのない62名 (配布者の41.6%、受診者の34.4%) を分析対象者とした。

全受診者は、受診時月齢が1歳5ヶ月10日～1歳10ヶ月2日であり、その内87.8%が1歳6ヶ月3日～1歳7ヶ月9日であり、97.8%が1歳6ヶ月3日～1歳8ヶ月9日であった。分析対象となった母親の子どもの性別は女児32名、男児30名であった。また、昼間の育児形態は、家庭にいる子が43名、保育園に通っている子が16名、その他3名であった。また、第1子が32名、第2子が18名、第3子が12名であった。

質問項目

子どもに対する育児語の使用 育児語を使う程度に多様性があるように調査語を決定した。対象名10項目、動作名5項目について、ふだん子どもに話しかけるときに、もっともよく使うことば1つを挙げてもらった。対象名10項目は、犬、牛、象、魚、りんご、うどん、自動車、靴、目、時計である。動作名5項目は、(手を)あろう、(よごれた机を)拭く、(紙くずを)捨てる、(ボールを)投げる、泣くである。記入にあたっては、以下の例のように選択肢を挙げ、1つに○をつけるように求めた。あてはまるものがない場合は、その他の欄に具体的に記入を求めた。

例 犬 「いぬ」 「わんわん」
 「いぬさん」 「わんちゃん」
 その他 ()

子どもへのことばかけについての信念 ことばかけに関する信念については、日本の養育者に関してこれを調べた研究が見当たらないことから、同じ東アジアの中国の養育者とアメリカの養育者のことばかけについての信念を比較した研究(Johnston, & Wong, 2002)、日本の養育者は、子どもに対することばかけについて、優しく、まねしやすく話しかけることを重視しているという考察(Fernald & Morikawa, 1993)を参考に、質問項目を作成した。

1歳半の子どもに、身の回りのことについて話しをするとき、どのように話しかけたいと思っているかに関する7項目について、7件法(非常にそう思う～まったくそう思わない)で回答を求めた。7項目は、1). やさしく話しかけるのがよいと思う、2). 大人とあまり区別せずと同じように話しかけるのがよいと思

う、3). 「りんご」・「ボール」などの物の名前を覚えるよりも、「ありがとう」・「おはよう」などのあいさつをおぼえることの方がだいじだと思う、4). 特別に教えなくても、まわりの人のことばを聞いていると、子どもは自然とことばをおぼえていくと思う、5). まわりのものに親しみがもてるように話しかけるのがよいと思う、6). 身ぶりをつけてことばを話しかけた方がよいと思う、7). 子どもがことばを20個ほどおぼえたら、「これなに?」などの質問をして、ことばをひきだすようにするのがよいと思う、というものであった。

社会化の目標 日本とアメリカの養育者を対象に発達期待を調べた研究(東・柏木・Hess, 1981; Tobin, Wu, & Davidson, 1989)、および、日本の母親を対象に社会化の目標を調べた研究(今泉・財前・末広, 1975)を参考に、5歳頃にどのような子どもに育ててほしいと考えているかに関する13項目について、7件法(非常にそう思う～まったくそう思わない)で回答を求めた。5歳頃という時期を設定したのは、日米間で社会化の目標を調べた研究(東ら, 1981; Tobin, et al., 1989)がこの年齢時期を問題としていたこと、養育者にとって比較的近い未来の方が、現実的な社会化の目標が調べやすいと考えたからである。13項目は、1). 思いやりのある子どもになってほしい、2). すなおな子どもになってほしい、3). 自分の考えをちゃんと言える子どもになってほしい、4). リーダーシップをとれる子どもになってほしい、5). がまん強い子どもになってほしい、6). 読み書きのよくできる子どもになってほしい、7). 他の子どもとよく遊ぶ子どもになってほしい、8). よく努力する子どもになってほしい、9). 外で遊ぶのが好きな子どもになってほしい、10). 食事や排泄などの生活習慣が身についた子ども

になってほしい, 11). あいさつのできる子どもになってほしい, 12). 独創性のある子どもになってほしい, 13). 自分(本人)のことを価値のある存在だと感じている子どもになってほしい, というものであった。

絵本の読み聞かせに関する基本情報 平均してどの程度の時間読み聞かせをしているか(1ヶ月あたり, または1週間あたり, または1日あたり), および, 家庭に保有する1歳半の子が見る絵本の冊数を尋ねた。

絵本の読み聞かせ方 子どもと一緒に絵本を見るとき, 養育者はどのようにしているかを問う10項目について, 6件法(よくそうしている~まったくそうしていない)で回答を求めた。村瀬(2004)で, 日本とアメリカのそれぞれの文書で多く取り上げられている読み聞かせ方を質問項目とした。10項目は, 1). ゆっくりと読むようにしている, 2). 声の調子をいろいろ変えて読むようにしている, 3). 絵本に描かれている物の名前を, 子どもに言うようにしている, 4). 子どもが, 指さしたり, ページをめくったり, 声を出したりなど, できることはできるだけさせるようにしている, 5). 子どもが指さしたり, 声を出したりした時は, できるだけそれに答えている, 6). 子どもが読んでほしいと言う時は, できるだけなんでもくり返し読むようにしている, 7). 絵本を読むことで子どもと楽しい時間がすごせるようにしている, 8). 絵本に描かれている動作などを自分が実演して見せている, 9). 「これなに?」など, 絵本に描かれていることについて, 子どもに聞くようにしている, 10). 自分からはあまりはたらきかけず, 子どものすることを見守るようにしている, というものであった。

絵本の読み聞かせに関する信念 1歳半ぐらいの子どもと一緒に養育者が絵本を見ること

には, どのようなよいことがあると思うかについて問う7項目について, 7件法(非常にそう思う~まったくそう思わない)で回答を求めた。質問項目は村瀬(2004), および, 幼児を持つ日本の母親に対して読み聞かせの意義についての信念を調査した結果(秋田・無藤, 1996)を参考に作成した。質問項目は, 1). ことばをふやすことができる, 2). 親子でふれあいの時間が持てる, 3). 想像力が豊かになる, 4). 文字をおぼえる準備をすることができる, 5). 静かにしていてくれる, 6). 日常生活で重要なことを教えることができる, 7). 子どもの気持ちが落ち着いたり, 楽しい気持ちになったりする, というものであった。

手続き

1歳6ヶ月児健診の待合時間に保護者に対して調査の依頼をした。調査の目的を説明し, 回答は自由意志によるものであり, 無記名でよいことを説明した。健診の終了時に保健師より調査用紙を配布し, 2週間以内に質問紙を調査者まで返送してもらうよう依頼した。

結 果

育児語の使用

対象名10項目, 動作名5項目に関して, 母親が子どもにどのようなことばを使っているかを, 擬音語擬態語, 音韻の反復, 接尾辞付加, 接頭辞付加に分類した。擬音語擬態語とは, 鳴き声やその対象がたてる音や様態を表したもので, 犬のことを「わんわん」, 牛のことを「もー」, 泣くことを「えんえん」と言うなどである。音韻の反復とは, 擬音語擬態語であれ成人語であれ, 同じ音節を繰り返すものであり, 目のことを「めめ」, 手を洗うことを「きれいきれい」, 牛のことを「もーもー」

と言うなどである。接尾辞付加とは、成人語や擬音語擬態語のうしろに「さん」や「ちゃん」などの接尾辞をつけることで、象のことを「ぞうさん」、犬のことを「わんちゃん」と言うなどである。接頭辞付加とは、成人語の前に「お」という接頭辞をつけることで、魚のことを「おさかな」、うどんのことを「おうどん」と言うなどである。また、犬のことを「いぬ」、牛のことを「うし」、手を洗うことを「あらう」など、成人に対して使う語と同じ語を使用している場合は、成人語と分類した。

Table 1 はそれぞれの対象、動作に対して、それぞれのタイプのことばを使っている母親の人数と全体に占めるパーセンテージである。なお、目のことを「おめめ」という場合は音韻反復にも接頭辞付加にもカウントするなどダブルコーディングをしているため、合計が100%を超えている項目がある。また、時計については、1名が話したことがないと答えた以外は全員が成人語を使用しているとの答えであったので、Table 1 には挙げていない。

対象名（時計を除く9項目）、動作名（5項目）

別に、擬音語擬態語、音韻反復、接尾辞付加、接頭辞付加の使用傾向についての信頼性を調べた。また、擬音語擬態語または音韻反復を使用している傾向についても信頼性を調べた。対象名については、 α 係数が0.65を超えるものがなかった。動作名については、擬音語擬態語または音韻反復が α 係数が比較的高かった（5つの動詞項目すべてを尺度項目として含めたとき $\alpha=0.69$ ）。対象名についての育児語で信頼性が低かったのは、同じ対象について、擬音語擬態語または音韻反復による育児語と、接尾辞または接頭辞付加による育児語のどちらもあり、対象者によって反応が分かれてしまったこと、ほとんどすべての対象者が育児語を使用している、ほとんどすべての対象者が成人語の使用をしていないなど、育児語と成人語に反応が分散しなかった項目が多かったことなど、項目選定の不備が考えられる。そこで、以下の分析では、動作名に関する擬音語擬態語または音韻反復による育児語使用の傾向のみを分析することとし、その尺度を構成する5項目のうち何項目

Table 1. 各項目に対するそれぞれの語のタイプを使用する母親の人数（%）

	擬音語擬態語	音韻反復	成人語	接尾辞付加	接頭辞付加
犬	62 (100)	59 (95)	0 (0)	3 (5)	0 (0)
牛	39 (63)	37 (60)	7 (11)	22 (35)	0 (0)
象	1 (2)	0 (0)	4 (6)	57 (92)	0 (0)
魚	0 (0)	36 (58)	2 (3)	9 (15)	23 (37)
りんご	0 (0)	3 (5)	58 (94)	1 (2)	0 (0)
うどん	26 (42)	28 (45)	25 (40)	1 (2)	9 (15)
自動車	55 (89)	55 (89)	7 (11)	0 (0)	0 (0)
靴	0 (0)	29 (47)	30 (48)	0 (0)	2 (3)
目	0 (0)	49 (79)	13 (21)	0 (0)	25 (40)
洗う	13 (21)	42 (68)	20 (32)		
拭く	0 (0)	56 (90)	6 (10)		
捨てる	55 (89)	3 (5)	4 (6)		
投げる	52 (84)	0 (0)	8 (13)		
泣く	44 (71)	44 (71)	17 (27)		

に育児語を使用しているかという値を使って分析を進めていくこととする。

なお、動作名に関する擬音語擬態語または音韻反復による育児語使用傾向について、子どもの出生順位、子どもの性別、昼間の育児形態（家庭か保育園か）による違いも検討したが、有意な違いは見られなかった。

ことばかけについての信念

ことばかけについての信念に関する質問に対する回答を、非常にそう思うを7点、全くそう思わないを1点として得点化した。各質問に対する肯定度の記述統計を Table 2 に示す。

これらの質問項目を主因子法で探索的に因子分析した。質問が多義的である項目、共通性が低い項目を除外して繰り返し分析した結果、1因子構造となり、「やさしく話しかけるのがよい」、「まわりのものに親しみがもてるように話しかけるのがよい」の2項目がその因子に高い負荷量を示した。この因子は、共感的ことばかけ志向の因子と考えられる。この2項目に対する肯定度が高いことが記述統計に示されている (Table 2)。この2項目の合計得点を共感的ことばかけ志向得点 ($\alpha = 0.62$) として以下の分析に用いることとする。

共感的ことばかけ志向得点について、子どもの出生順位、性別、昼間の育児形態による

違いは見られなかった。

社会化の目標

社会化の目標についての質問に対する回答を、非常にそう思うを7点、全くそう思わないを1点として得点化した。各質問に対する肯定度の記述統計を Table 3 に示す。

これらの質問項目を主因子法で探索的に因子分析し、共通性の低い項目を除外して分析を繰り返した結果、解釈可能な2因子が抽出された (固有値は3.18, 1.67である)。プロマックス回転後の因子負荷量を Table 4 に示す。

第I因子はすなおな子、思いやりのある子、自分の考えをちゃんとと言える子、自分を価値ある存在と感じている子、あいさつのできる子、他の子どもと遊ぶ子に因子負荷量が高く、自律性関係性重視社会化目標の因子、第II因子はリーダーシップのとれる子、読み書きのよくできる子、がまん強い子に因子負荷量が高く、達成重視社会化目標の因子と解釈された。全体として、第I因子に負荷量の高い項目に対する肯定度が高いことが記述統計に示されている (Table 3)。第I因子に負荷量の高い6項目 ($\alpha = 0.78$)、第II因子に負荷量の高い3項目 ($\alpha = 0.62$) の合計得点を、それぞれ自律性関係性重視社会化目標得点、達成重視社会化目標得点として、以下の分析に用いる

Table 2. ことばかけについての信念各質問への肯定度記述統計

	平均値	標準偏差
やさしく話しかけるのがよい	5.79	0.85
まわりのものに親しみがもてるように話しかけるのがよい	5.77	0.66
身ぶりをつけてことばを話しかけた方がよい	4.87	1.25
ことばを20個ほど覚えたら質問をしてことばを引き出すのがよい	4.77	1.34
特別に教えなくても自然とことばをおぼえていく	4.73	1.50
物の名前を覚えるよりもあいさつを覚える方が大事だ	4.06	1.28
大人とあまり区別せず同じように話しかけるのがよい	3.69	1.52

Table 3. 社会化の目標に関する各質問への肯定度記述統計

	平均値	標準偏差
あいさつのできる子	6.48	0.57
思いやりのある子	6.34	0.77
すなおな子	6.26	0.70
生活習慣が身についた子	6.13	0.61
他の子どもとよく遊ぶ子	6.06	0.72
自分の考えをちゃんとと言える子	6.00	0.94
外で遊ぶのが好きな子	5.89	0.85
自分のことを価値ある存在だと感じている子	5.66	0.94
よく努力する子	5.56	1.15
独創性のある子	5.06	1.15
がまん強い子	5.02	1.15
読み書きのよくできる子	4.98	1.44
リーダーシップを取れる子	4.23	1.12

Table 4. 社会化の目標因子分析結果 (Promax 回転後因子負荷量)

	I	II
すなおな子	0.82	0.07
思いやりのある子	0.82	0.11
自分の考えをちゃんとと言える子	0.62	0.10
自分のことを価値ある存在だと感じている子	0.56	-0.14
あいさつのできる子	0.50	-0.07
他の子どもとよく遊ぶ子	0.49	-0.15
リーダーシップをとれる子	-0.23	0.73
読み書きのよくできる子	0.12	0.55
がまん強い子	0.00	0.55

因子間相関 0.30

こととする。

自律性関係性重視社会化目標得点、達成重視社会化目標得点のそれぞれについて、子どもの出生順位、性別、昼間の育児形態の違いを検討したところ、達成重視社会化目標得点は子どもの出生順位による違いがあり、第1子に対しては第2子よりも達成重視社会化目標得点が高かった(第1子の平均得点14.91, 第2子の平均得点12.61, 第3子の平均得点14.83, $F(2, 59) = 4.66, p < .05$)。

育児語の使用と望ましい子ども像・

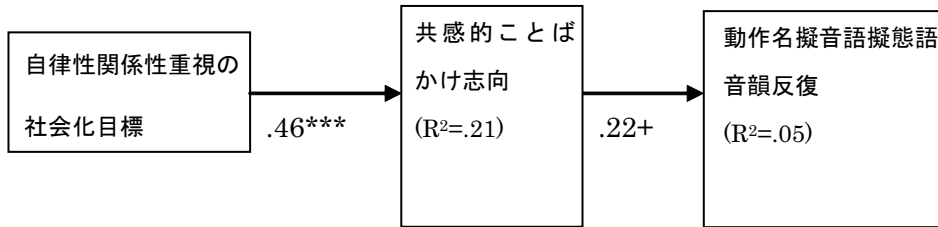
ことばかけについての信念との関係
動作名に対する擬音語擬態語または音韻反復による育児語使用傾向と、共感的ことばかけ志向、自律性関係性重視社会化目標、達成重視社会化目標との関連性を調べた。単純相関の結果を Table 5 に示す。

社会化の目標がことばかけについての信念に影響を及ぼし、社会化の目標とことばかけについての信念が育児語の使用傾向に影響を及ぼすと仮定して、Amos5.0を用いてパス解

Table 5. 育児語使用傾向と養育者の信念の関連性（相関係数）

	動作名擬音語 擬態語音韻反復	共感的ことばかけ 志向	自律性関係性重視 社会化目標
共感的ことばかけ志向	0.22+		
自律性関係性重視社会化目標	0.12	0.46***	
達成重視社会化目標	0.05	0.02	0.18

*** $p < .001$, + $p < .10$



*** $p < .001$, + $p < .10$

Figure 1. 社会化の目標，ことばかけについての信念，動作名についての育児語使用傾向の関連性

析を行ったところ，Figure 1 に示すモデルが
あてはまりがよかった ($\chi^2 = 0.037$, $df = 1$,
 $p = .848$, $GFI = 1.000$, $AGFI = .998$,
 $RMSEA = .000$, $AIC = 10.037$)。自律性関係性
重視の社会化目標から共感的ことばかけ志向
に有意な正のパスが示され，共感的ことばか
け志向から動作名の擬音語擬態語または音韻
反復による育児語使用傾向に対する正のパス
が有意水準に近いレベルであった。

読み聞かせをする時間・家庭に

保有する絵本の数

読み聞かせをする平均時間を Table 6 に示
す。約 82% が 1 週間に 15 分～1 日に 20 分
(1 週間に 140 分) 未満読み聞かせをしていた。

家庭に保有する 1 歳半の子どもが見る絵本
の数の範囲は 3～50 冊で，平均は 17.0 冊であ
った。

絵本の読み聞かせ方

絵本の読み聞かせ方に関する質問項目に無
回答であった調査対象者が 1 名いたので，こ

Table 6. 読み聞かせをする平均時間

平均読み聞かせ時間	人数
1 週間あたり 5 分未満	2
1 週間あたり 5 分～15 分未満	5
1 週間あたり 15 分～30 分	11
1 日あたり 5 分～10 分未満	17
1 日あたり 10 分～15 分未満	14
1 日あたり 15 分～20 分未満	9
1 日あたり 20 分以上	4

の分析はこの調査対象者を除く 61 名のデー
タに基づいて行った。

絵本の読み聞かせ方についての質問に対す
る回答を，よくそうしているを 6 点，全くそ
うしていないを 1 点として得点化した。各質
問に対する肯定度の記述統計を Table 7 に示
す。

これらの質問項目を主因子法で探索的に因
子分析し，共通性の低い項目を除外して繰り
返し分析した結果，解釈可能な 2 因子が抽出
された（固有値は 3.00, 1.63 である）。プロ
マックス回転後の因子負荷量を Table 8 に示
す。第 I 因子は「描かれていることについて

Table 7. 読み聞かせ方各質問への肯定度記述統計

	平均値	標準偏差
子どもが指さしたり、声を出したりした時は、できるだけそれに答えている	5.80	0.48
子どもが、指さしたり、ページをめくったり、声を出したりなど、できることはできるだけさせるようにしている	5.62	0.69
絵本を読むことで子どもと楽しい時間がすごせるようにしている	5.25	0.81
子どもが読んでほしいと言う時は、できるだけなんどもくり返し読むようにしている	5.21	1.00
声の調子をいろいろ変えて読むようにしている	5.07	1.06
ゆっくりと読むようにしている	5.05	1.04
絵本に描かれている物の名前を、子どもに言うようにしている	5.00	1.20
自分からはあまりはたらきかけず、子どものすることを見守るようにしている	4.51	0.96
「これなに？」など、絵本に描かれていることについて、子どもに聞くようにしている	4.39	1.19
絵本に描かれている動作などを自分が実演して見せている	3.74	1.28

Table 8. 読み聞かせ方に関する因子分析結果（プロマックス回転後因子負荷量）

	I	II
「これなに？」など、絵本に描かれていることについて、子どもに聞くようにしている	0.84	-0.25
絵本に描かれている物の名前を、子どもに言うようにしている	0.68	0.09
声の調子をいろいろ変えて読むようにしている	0.60	0.07
絵本に描かれている動作などを自分が実演して見せている	0.53	0.20
子どもが読んでほしいと言う時は、できるだけなんどもくり返し読むようにしている	-0.15	0.93
絵本を読むことで子どもと楽しい時間がすごせるようにしている	0.06	0.78
子どもが指さしたり、声を出したりした時は、できるだけそれに答えている	0.34	0.50

因子間相関 0.29

子どもに聞くようにしている」、「描かれているものの名前を子どもに言うようにしている」、「声の調子を変えて読むようにしている」、「描かれている動作などを自分が実演してみせる」に因子負荷量が高く、対話的読み聞かせの因子、第Ⅱ因子は、「できるだけなんどもくり返して読む」、「子どもと楽しい時間が過ごせるようにする」、「できるだけ子どもに答える」に因子負荷量が高く、受容的読み聞かせの因子と解釈される。受容的読み聞かせに高い負荷量を示す「できるだけなんどもくり返して読む」、「子どもと楽しい時間が過ごせるようにする」、「できるだけ子どもに答える」が、比較的高い肯定度を示している

(Table 7)。第Ⅰ因子に負荷量の高い4項目 ($\alpha=0.76$) の合計得点を対話的読み聞かせ得点、第Ⅱ因子に負荷量の高い3項目 ($\alpha=0.77$) の合計得点を受容的読み聞かせ得点として、以下の分析に用いることとする。

対話的読み聞かせ得点、受容的読み聞かせ得点それぞれについて、子どもの出生順位、性別、昼間の育児形態による違いは見られなかった。

絵本の読み聞かせについての信念

絵本の読み聞かせについての信念に関する質問に対する回答を、非常にそう思うを7点、全くそう思わないを1点として得点化した。

Table 9. 読み聞かせに関する信念各質問への肯定度記述統計

	平均値	標準偏差
親子でふれあいの時間が持てる	6.39	0.55
想像力が豊かになる	5.98	0.90
ことばをふやすことができる	5.76	0.92
気持ちが落ち着いたり楽しい気持ちになったりする	5.74	0.99
文字を覚える準備ができる	5.21	1.20
日常生活で重要なことを教えることができる	4.73	1.16
静かにしてしてくれる	3.32	1.23

Table 10. 読み聞かせに関する信念因子分析結果（プロマックス回転後因子負荷量）

	I	II
想像力が豊かになる	0.97	-0.09
親子でふれあいの時間が持てる	0.54	-0.12
静かにしてしてくれる	-0.37	0.69
文字を覚える準備ができる	0.10	0.68
ことばをふやすことができる	0.35	0.60
日常生活で重要なことを教えることができる	0.15	0.50

因子間相関 0.59

各質問に対する肯定度の記述統計を Table 9 に示す。

これらの質問項目を主因子法で探索的に因子分析した。共通性の低い項目を除外して繰り返し分析した結果、解釈可能な 2 因子が抽出された（固有値は 2.76, 1.21 である）。プロマックス回転後の因子負荷量を Table 10 に示す。第 I 因子は、「想像力が豊かになる」、「親子でふれあいの時間が持てる」に高い因子負荷量を示し、情緒的機能重視の因子と、第 II 因子は、「静かにしてしてくれる」、「文字を覚える準備ができる」、「ことばをふやすことができる」、「日常生活で重要なことを教えることができる」に高い因子負荷量を示し、実用的機能重視の因子と解釈される。情緒的機能重視の因子に負荷量の高い「親子でふれあいの時間が持てる」、「想像力が豊かになる」に対する肯定の度合いが相対的に高いことが記述統計の結果からわかる（Table 9）。第 I 因子

に高い負荷量を示した 2 項目は信頼性が低いが ($\alpha=0.57$)、その合計得点を読み聞かせの情緒的機能重視得点、第 II 因子に高い負荷量を示した 4 項目 ($\alpha=0.72$) の合計得点を読み聞かせの実用的機能重視得点として、以下の分析に用いることとする。

情緒的機能重視得点、実用的機能重視得点それぞれについて、子どもの出生順位、性別、昼間の育児形態による違いは見られなかった。

育児語の使用傾向と絵本の読み聞かせ方

絵本の読み聞かせ方に関する質問項目に無回答であった 1 名を除く 61 名のデータに基づいて分析を行った。

動作名についての擬音語擬態語または音韻反復を用いての育児語の使用傾向と、絵本の読み聞かせ方における対話的読み聞かせと受容的読み聞かせの関係を、単純相関を求めて検討したところ、動作名についての育児語の

使用傾向と受容的読み聞かせとの間には有意な正の相関が見られたが、対話的読み聞かせとの間には有意な相関は見られなかった (Table 11)。

Table 11. 動作名での育児語の使用傾向と絵本の読み聞かせ方の相関係数

	動作名擬音語 擬態語・音韻反復
対話的読み聞かせ	0.07
受容的読み聞かせ	0.30 *

* $p < .05$

絵本の読み聞かせ方と社会化の目標・ことばかけについての信念・絵本の読み聞かせについての信念との関係

社会化目標、ことばかけについての信念、絵本の読み聞かせについての信念、絵本の読み聞かせ方のそれぞれの得点間の単純相関を調べた結果、自律性関係性重視社会化目標得点は、読み聞かせについての信念における情緒的機能重視得点と正の相関を示した。達成重視社会化目標得点は、読み聞かせについての信念における実用的機能重視得点と正の相関を示した。自律性関係性重視社会化目標得点は、対話的読み聞かせとも正の相関を示した。また、ことばかけについての信念における共感的ことばかけ志向得点は、読み聞かせについての信念における情緒的機能重視得点にも実用的機能重視得点にも正の相関を示し

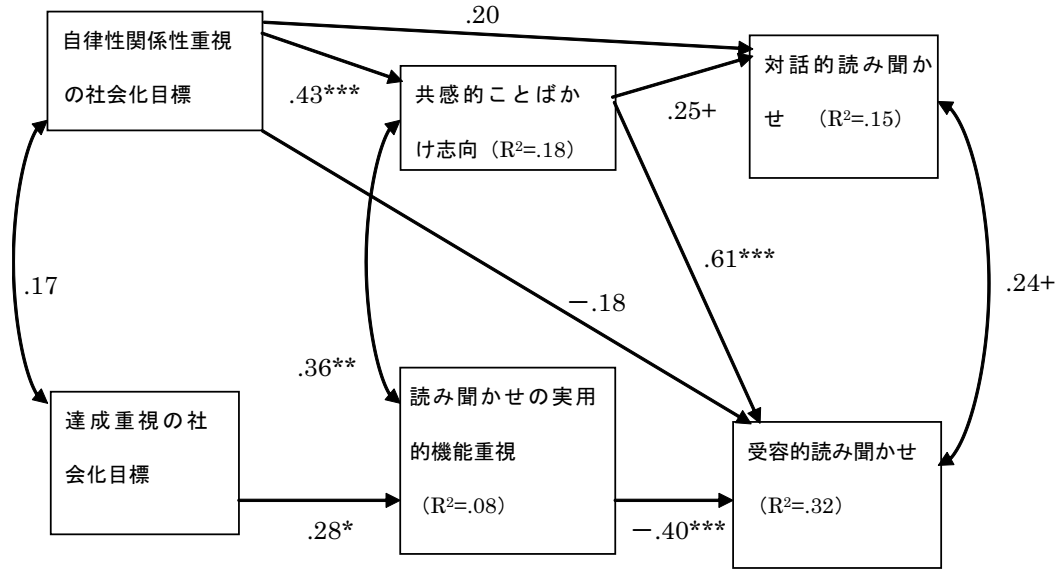
た。共感的ことばかけ志向得点は、絵本の読み聞かせ方における対話的読み聞かせにも受容的読み聞かせにも正の相関を示した (Table 12)。

社会化の目標がことばかけについての信念、および、絵本の読み聞かせについての信念に影響を及ぼし、社会化の目標・ことばかけについての信念・絵本の読み聞かせについての信念が、絵本の読み聞かせ方に影響を及ぼすと仮定してモデルを立て、Amos5.0を用いて共分散構造分析を行った。この分析も61名のデータに基づいて行った。有意な関連性が見られない部分を除外して、あてはまりのよいモデルを得た ($\chi^2=3.948$, $df=5$, $p=.557$, $GFI=0.979$, $AGFI=.911$, $RMSEA=.000$, $AIC=35.948$)。自律性関係性重視の社会化目標が共感的ことばかけ志向に有意な正のパスを示し、達成重視の社会化目標が読み聞かせの実用的機能重視に有意な正のパスを示していた。共感的ことばかけ志向は受容的読み聞かせに有意な正のパスを示し、対話的読み聞かせへも正のパスが有意水準に近いレベルで見られた。また、読み聞かせの実用的機能重視が受容的読み聞かせに有意な負のパスを示していた (Figure 2)。

Table 12. 社会化目標、ことばかけについての信念、読み聞かせについての信念、読み聞かせ方の間の相関係数

	自律性関係性 重視社会化 目標	達成重視 社会化 目標	共感的 ことばかけ 志向	読み聞かせ 情緒的機能 重視信念	読み聞かせ 実用的機能 重視信念
読み聞かせ情緒的機能重視信念	0.49***	-0.14	0.41***		
読み聞かせ実用的機能重視信念	0.17	0.26*	0.36**		
対話的読み聞かせ	0.32*	0.12	0.35**	0.19	0.13
受容的読み聞かせ	0.03	0.04	0.39**	0.05	-0.20

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$



*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

Figure 2. 社会化の目標，読み聞かせについての信念，ことばかけについての信念，読み聞かせ方の関連性

考 察

育児語の使用と母親の信念

本研究の結果，動作名について擬音語擬態語または音韻反復の育児語を使用する傾向に対して，共感のことばかけ志向から正のパスが見られる傾向があった。Ferguson (1977) は，育児語のひとつの形態である接辞の付加に関して，養育者が情緒的要素を付加するという表出的・同一化の過程によって生じていると考えている。子どもに対して優しく話しかける，まわりのものに親しみがもてるように話しかけるという共感のことばかけ志向は，この表出的・同一化過程に対応すると考えられる。本研究は，接辞の付加に関しては，信頼性の高い尺度が構成できなかったために共感のことばかけ志向との関連性を検討することができなかったが，擬音語擬態語または音韻反復という育児語の形態について，日本の母親においては，表出的・同一化の過程が関

与していると考えられる。

本研究では，動作名についての擬音語擬態語または音韻反復以外の育児語は，信頼性の高い尺度を得ることができなかった。このような結果になったのは，複数のタイプの育児語に育児語の使用が分かれることや，本研究で取り上げた項目では，育児語を使用するかどうかの分散がほとんど見られなかった項目が多く含まれていたためであると考えられる。また，ことばかけについての信念に関しても，質問に多義的なものが含まれ，尺度として構成できたものは共感のことばかけ志向のみであった。これらの点を改良して，育児語とことばかけについての信念の関係を検討しなおすことが必要であろう。

社会化の目標に関しては，自律性関係性重視の社会化目標の因子が抽出されたが，これは文化心理学で言われる相互協調的自己と相互独立的自己の特徴 (Markus & Kitayama, 1991) を双方とも併せ持つものであ

る。従来、日本人は北米の人と比較して、相互協調的自己の特徴が強く相互独立的自己の特徴が弱いといわれてきた。しかし、近年の研究では、このような二分法は批判され、相互独立的自己と関連する自律性と、相互協調的自己と関連する他者との関係性は、対極におかれるものではなく、別個の次元として考えられるべきであるというモデルが提案されている。このモデルでは、自律性と他者との関係性がともに高い「自律的-関係的自己」という自己のあり方が想定されている。相互協調的自己を特徴的に示していた社会が、都市化と経済的発展をすることに伴い、人々は、世代間での物質的な相互依存性はなくなるものの心理的な相互依存性は継続し、自律的-関係的自己を示すと考えられている (Kagitcibasi, 2005)。

相互協調的自己、相互独立的自己の特徴に関する項目が高い負荷を示す自律性関係性重視の社会化目標の因子が本研究で抽出されたことは、日本の母親は、二分法的に相互協調的と特徴付けられるような社会化目標を子どもに対して強く持つのではなく、自律性と関係性をともに併せ持つ自律的-関係的自己と特徴付けられるような社会化目標を子どもに対して持っていることが示唆される。しかしながら、そのように結論づける前に、方法論的な検討をする必要があると考えられる。というのは、社会化の目標で抽出されたそれぞれの因子に負荷の高い項目は、質問順が連続しているものが多い傾向があったからである。このことは、因子の抽出に質問順が影響している可能性を残していることを示している。質問順を複数パターン準備して質問順の効果を減少させる形で再度調査を実施し、日本の母親が子どもに対して持つ社会化の目標を検討し直す必要がある。

以上のような問題点はあるものの、自律性関係性重視の社会化目標から共感的ことばかけ志向に対して正のパスが見られたことは、日本の母親の子どもに対することばかけについての信念は、文化心理学で議論されている自己のあり方の特徴に基礎付けられた一般的な子ども観と関係付けることができることを示している。

絵本の読み聞かせ方と母親の信念との関連性

絵本の読み聞かせ方に関しては、対話的読み聞かせの因子と受容的読み聞かせの因子が抽出された。対話的読み聞かせの因子は、日本の公共図書館のパンフレットよりもアメリカの公共図書館のパンフレットで絵本の読み聞かせ方として勧める傾向が強いものである (村瀬, 2004)。この読み聞かせ方は、語彙獲得に対して正の効果をもたらすとされる読み聞かせ方であり (Arnold & Whitehurst, 1994)、日本の母親よりもアメリカの母親においてより顕著な読み聞かせ方である (Murase et al., 2005)。一方、受容的読み聞かせの因子は、アメリカの公共図書館のパンフレットよりも日本の公共図書館のパンフレットでより強調されていた「子どもと楽しい時間を過ごすようにしている」という項目が高く負荷しているが、他の二項目は必ずしも日米間での差異として挙げられているものではない。受容的読み聞かせ方が米国の親子に比べて日本の親子で顕著なものであるかどうかは、比較データがないので検討できないが、本研究で、対話的読み聞かせの因子に高く負荷した項目よりも受容的読み聞かせに高く負荷した項目により高い肯定度を示したことから、日本の母親は、相対的に対話的読み聞かせ方よりは受容的読み聞かせ方をしていると言える。

絵本の読み聞かせについての信念に関しては、情緒的機能重視の因子と実用的機能重視の因子が抽出された。これは、幼児を持つ母親を対象とした秋田・無藤(1996)と同様の結果である。また、情緒的機能重視の因子に負荷量の高い、親子でふれあいの時間が持てる、想像力が豊かになるといった項目に対する肯定の度合いが高い。これも、幼児を持つ母親を対象とした秋田・無藤(1996)と同様の結果である。また、この二項目は、日本の公共図書館で養育者に対して読み聞かせの機能として強調されているもの(村瀬, 2004)と一致する。以上のことから、日本の子どもを取り巻く成人においては、母親であれ専門機関であれ、乳児期から幼児期まで一貫して読み聞かせに関して情緒的な機能を重視していると言えるだろう。

絵本の読み聞かせ方と母親の信念の関係については、読み聞かせに対して情緒的機能を重視する信念からは、対話的読み聞かせについても受容的読み聞かせについても、有意な関係性が示されなかった。しかし、子どもに対することばかけについての信念における共感のことばかけ志向からは、対話的読み聞かせに対しても受容的読み聞かせに対しても正のパスが得られた。また、共感のことばかけ志向は、絵本の読み聞かせに関する信念における情緒的機能重視にも実用的機能重視にも正の相関を示している。したがって、共感のことばかけを促すという志向性は、1歳半頃の子どもに対する絵本の読み聞かせの効用について全体として肯定的な信念を抱かせ、また、1歳半頃の子どもに対して、母親に対話的にも受容的にも絵本の読み聞かせを行わせる促進要因となっていると考えられる。

受容的読み聞かせとともに、対話的読み聞かせに対しても、共感のことばかけ志向から

正のパスが示されたことは注目すべき結果である。従来の研究で、共感のことばかけ志向は、日本の母親において特徴的なことばかけについての信念であり、対話的読み聞かせはアメリカの親子や専門機関に特徴的に見られる読み聞かせ方であるとされているからである。相互協動的、相互独立的という二分法的な文化観で日本の母親の持つ信念と言語行動を考えようとした場合、このような結果が得られることは想定しにくい。このような結果が見られたことは、先述のように、日本の母親が自律的一関係の自己と特徴付けられる自己のあり方を特徴的に持つことの表れなのだろうか、あるいは、自律性や関係性という文脈で捉えるよりも、共感のことばかけ志向を強く持つことが、絵本の読み聞かせを全体的に強く肯定させていると考えるべきなのだろうか。本研究のデータからは結論めいたことは言えないが、共感のことばかけ志向は日本の母親の言語行動を規定する重要な要因であり、これをキー概念として様々な言語行動を説明することができるのではないだろうか。

共分散構造分析の結果、読み聞かせについての実用的機能重視からは、受容的読み聞かせに対して有意な負のパスが見られた。実用的機能重視も、共感のことばかけ志向と正の相関関係を示しているのだが、他の信念が統制された場合、このように受容的読み聞かせと負の関係を示すといえる。また、読み聞かせの実用的機能重視へは、達成志向の子ども像から有意な正のパスが見られている。これらのことから、子どもに対して達成を志向した社会化目標を抱いている母親は、読み聞かせに関しても実用的な機能を重視しており、その読み聞かせ方は、受容的読み聞かせ方にはなりにくいと言える。

育児語の使用と絵本の読み聞かせ方

動作名について擬音語擬態語または音韻反復の育児語を使用する傾向は、対話的読み聞かせとは有意な相関を示さず、受容的読み聞かせと正の相関を示した。本研究は、育児語の使用や絵本の読み聞かせ方など母親の言語行動と母親の持つ信念の関係を明らかにすることを主たる目的としているが、母親の言語行動間の関係を明らかにすることによっても、母親がそれぞれの言語行動をなぜとるのかを明らかにすることができると考えられる。今後、他の行動との関連性をさらに明らかにすることによって、母親がそれぞれの行動をとる意味を検討することができるであろう。

今後の課題

本研究は、育児語の使用についても、絵本の読み聞かせ方についても、養育者への質問紙に対する反応を分析したものである。つまり、養育者の自分の行動に対する認知を測定したものであり、実際の養育者の言語行動を測定したものではない。養育者の自分の行動についての認知と実際の行動は食い違いを見せる可能性があるため、今後、養育者の実際の言語行動と養育者の信念との関係を調べる必要がある。

このような限界はあるが、本研究は、母親が育児語を使用したり、特定の絵本の読み聞かせ方をするのがなぜであるのかということ、母親の持つ信念との関係によって明らかにした。今後、質問項目の改定をした上での再調査、行動指標と信念との関連を検討する研究によって、本研究で示された結果をさらに確かめていくことが必要である。

付 記

本研究は、科学研究費補助金基盤研究 (C)

(2) (課題番号:16530425,代表者:村瀬俊樹)の補助を受けた。

引用文献

- 秋田喜代美・無藤隆 (1996). 幼児への読み聞かせに対する母親の考えと読書環境に関する行動の検討. *教育心理学研究*, 44, 109-120.
- Arnold, D. S., & Whitehurst, G. J. (1994). Accelerating language development through picture book reading: A summary of dialogic reading and its effects. D. K. Dickinson (Ed.) *Bridges to Literacy: Children, Families, and School* (pp.103-28). Malden, MA: Blackwell.
- 東洋・柏木恵子・Hess, R. D. (1981). *母親の態度・行動と子どもの知的発達: 日米比較研究*. 東京: 東京大学出版会.
- Ferguson, C. A. (1977). Baby talk as a simplified register. C. E. Snow & C. A. Ferguson (Eds.) *Talking to children* (pp.209-235). Cambridge: Cambridge University Press.
- Fernald, A., & Morikawa, H. (1993). Common themes and cultural variations in Japanese and American mothers' speech to infants. *Child Development*, 64, 637-656.
- Garton, A. F. (1992). *Social Interaction and the Development of Language and Cognition*. Hove, U.K.: Lawrence Erlbaum Associates Ltd.
- 早川勝広 (1981) 育児語と言語獲得, *言語生活*, 351, 50-56.
- 今泉信人・財前千江美・末広和子 (1975). 現代の母親の児童観, 育児観, 育児の実態に関する研究 (I): 現代の母親の児童観の一般的傾向の検討, *福岡教育大学紀要*, 25, 67-79.

- Johnston, J. R., & Wong, M. -Y. A. (2002). Cultural differences in beliefs and practices concerning talk to children, *Journal of Speech, Language, and Hearing Research*, 45, 916-926.
- Kagitcibasi, C. (2005). Autonomy and relatedness in cultural context: Implications for self and family. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 36, 403-422.
- 小林祐子 (1986) Baby Talk の日米比較：日米母親の発話行動の事例的研究, *東京女子大学附属比較文化研究所紀要*, 47, 121-139.
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- 村瀬俊樹 (2004). 乳児への絵本の読み聞かせについての信念に関する研究：公共図書館の養育者向けガイド文書の日米比較. *社会文化論集 (島根大学法文学部紀要社会文化学科編)*, 1, 53-60.
- Murase, T., Dale, P. S., Ogura, T., Yamashita, Y., & Mahieu, A. (2005). Mother-child conversation during joint picture book reading in Japan and the USA. *First Language*, 25, 197-218.
- 村瀬俊樹・小椋たみ子・山下由紀恵 (2007). 養育者における育児語使用傾向の構造と育児語使用を規定する要因. *社会文化論集 (島根大学法文学部紀要社会文化学科編)*, 4, 17-30.
- 村田孝次 (1960) 育児語の研究：幼児の言語習得の一条件として, *心理学研究*, 31, 33-38.
- Pine, J. M. (1994). The language of primary caregivers. In C. Gallaway, & B. J. Richards (Eds.) *Input and Interaction in Language Acquisition* (pp.15-37). Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Shweder, R. A., Goodnow, J., Hatano, G., LeVine, R. A., Markus, H., & Miller, P. (1998). The cultural psychology of development: One mind, many mentalities. In W. Damon, & R. M. Lerner (Eds.) *Handbook of Child Psychology: Vol. 1 Theoretical Models of Human Development* (5th ed., pp.865-937). New York, John Wiley & Sons.
- Sigel, I. E. & McGillicuddy-DeLisi, A. V. (2002). Parent beliefs are cognitions: The dynamic belief systems model. In M. H. Bornstein (Ed.) *Handbook of Parenting Second Edition vol. 3 Being and Becoming a Parent* (pp.485-508). Mahwah, NJ.: LEA.
- Tobin, J. J., Wu, D. Y. H., & Davidson, D. H. (1989). *Preschool in Three Cultures: Japan, China, and the United States*. New Heaven and London: Yale University Press.
- Toda, S., Fogel, A., & Kawai, M. (1990). Maternal speech to three-month-old infants in the United States and Japan. *Journal of Child Language*, 17, 279-294.
- 友定賢治 (2005). *育児語彙の開く世界*. 大阪：和泉書院.

